

40422

教科書文庫

4

110

33-1942

~~2000-0~~  
19374

20003

02728

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

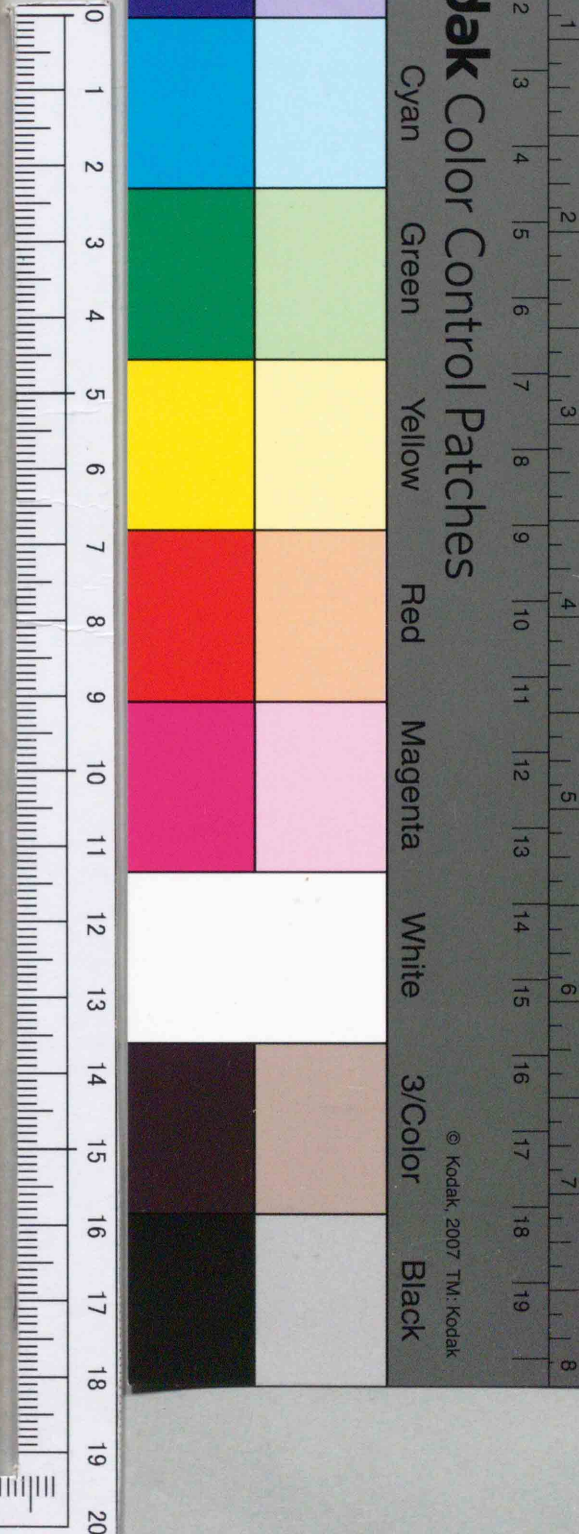


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫  
4  
110  
33-1942  
2000302728

初等科修身

二

文部省



教科書文庫  
4  
110  
33-1942  
2000302728

資料室

775.9  
Mo 140

初等科修身

文  
部  
省

二

広島大学図書  
2000302728  


教育ニ關スル勅語

廣島大學圖書印

廣島大學  
教  
19374  
圖書

朕チン惟オモフニ我ワ力クワク皇祖クワク皇宗クワク國クワクヲ肇ハジムルコト宏遠クワクニ  
德トクヲ樹ツクツルコト深厚シンコウナリ我ワ力クワク臣民シンミン克ヨクク忠チュウニ克ヨク  
ク孝カウニ億兆オクテウ心ココロヲ一イツニシテ世ヨ々ヨソ厥ノ美ビヲ濟ナセル  
ハ此コレ我ワ力クワク國體クワクノ精華セイカクニシテ教育ケウイクノ淵源エンゲン亦實マツ  
ニ此ココニ存ソンス爾ナンチ臣民シンミン父母フボニ孝カウニ兄弟ケイテイニ友イウニ夫婦フウフ  
相和アヒシ朋友ホウイウ相信アヒシンシ恭儉キョウケン己オノレヲ持チシ博愛ハクアイ衆シユニ及オヨ  
ホシ學ガクヲ修シユメ業ゲツヲ習ナラヒ以モツテ智能チノウヲ啓發ケイハツシ德器トクキ  
ヲ成就シヤウジユシ進スンテ公益コウエキヲ廣ヒロメ世務セイムヲ開ヒラキ常ツネニ國憲クワケン  
ヲ重オモシシ國法クワハフニ遵シタカヒ一旦イツタン緩急クワンキヤクアレハ義勇ギユウ公コウニ奉ホウ

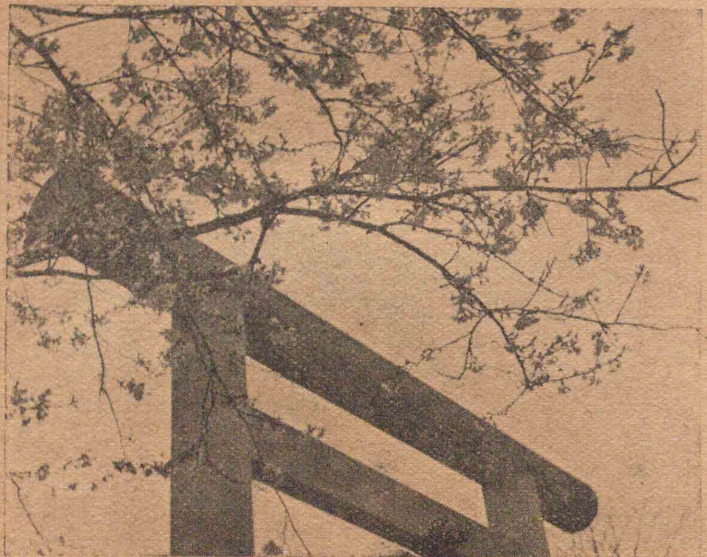
シ以モツテ天壤テンジヤウ無窮ムキウノ皇運クワクヲ扶翼フヨクスヘシ是カクノ如ゴトキ  
ハ獨ヒトリ朕力チン忠良チュウリヤウノ臣民シンミンタルノミナラス又以オモツテ  
爾祖ナシテ先センノ遺風ヒフウヲ顯彰ケンシヤウスルニ足タラン  
斯コノ道ミチハ實ジツニ我力クワク皇祖クワク皇宗クワクノ遺訓ヰクンニシテ子孫シソン  
臣民シンミンノ俱トモニ遵守ジュンシユスヘキ所トコロ之コレヲ古今ココンニ通ツウシテ謬アヤマ  
ラス之コレヲ中外チュウガイニ施ホトコシテ悖モトラス朕爾チンナンチ臣民シンミント俱トモニ  
拳ケン々ケン服膺フクヨウシテ咸ミンナ其德ノトクヲ一イツニセンコトヲ庶幾ソヒネガフ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

もくろく

一	春から夏へ	一
二	「君が代」	四
三	靖國神社 <small>やすくに</small>	七
四	能久親王 <small>よしひさしんのう</small>	十
五	宮古島 <small>みやこ</small> の人々	十五
六	日本は神の國	二十
七	野口英世 <small>ひてよ</small>	二十四
八	日本は海の國	三十二
九	焼けなかつた町	三十五



一 春から夏へ

四月三日の神武天皇祭じんぶてんわうまつりには、  
そろそろさくらの花が咲きま  
す。この日は、神武天皇がおか  
くれになつた日で、宮中では、お  
祭があります。  
さくらの花も散つて、春風に  
若葉がそよぐころ、私たちは、四

十	秋から冬へ	四十
十一	山田長政 <small>ながまさ</small>	四十四
十二	ことばづかひ	五十
十三	明治天皇の御徳 <small>おんとく</small>	五十四
十四	雅澄 <small>まさずみ</small> の研究 <small>けんきゆう</small>	五十八
十五	乗合船	六十二
十六	新年から春へ	七十
十七	乃木大將 <small>のぎ</small> の少年時代	七十三
十八	くるめがすり	七十八
十九	工夫する少年	八十二
二十	大陸と私たち	八十八

月二十九日の天長節を迎へます。この日、國民はこぞつて、天皇陛下の御代萬歳をことほぎたてまつります。

八十八夜の過ぎるころから、農家では、仕事がかたんだんいそがしくなつて來ます。苗代をこしらへたり、かひこ



を飼つたり、麥の取入れをしたり、田植をしたり、田の草を取つたり、害虫

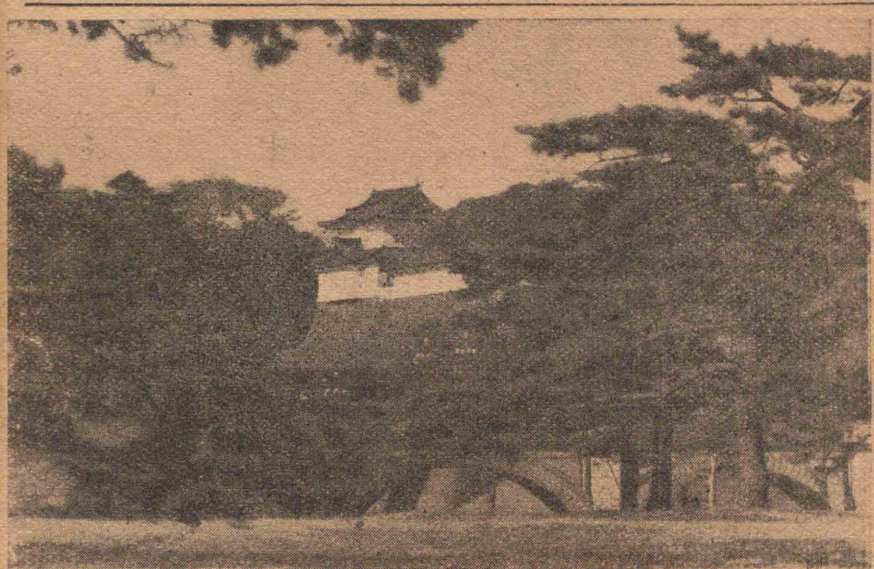


をのぞいたり、次から次へと、仕事がつづきます。暑い日ざしのもとで、汗を流して働きます。

祝日には、宮中で、おいはひの御儀式がおこなわれます。私たちの學校でも、式があげられます。

祭日には、宮中で、いろいろのお祭があります。

宮中には、賢所、皇靈殿、神殿と申す三つの御殿があつて、天皇陛下が、したしくお祭をなさるのであります。祭日には、學校の授業はありません。しかし、私たちは、その日つつしみの心をもつて、過ぎなければなりません。



二 「君が代」

君が代は

ちよにやちよに

さざれ石の

いはほとなりて

こけのむすまで

この歌は、

「天皇陛下のお治めになる御代

は、千年も萬年もつづいて、おさかえになりますやうに。」  
といふ意味で、國民が心からおいはひ申しあげる歌であります。

「君が代の歌は、昔から、私たちの先祖が、皇室のみさかえ  
をおいのりして、歌ひつづけて來た  
もので、世々の國民のまごころ  
のとけこんだ歌であります。  
祝日や、おめでたい儀式に  
は、私たちは、この歌を聲高く歌

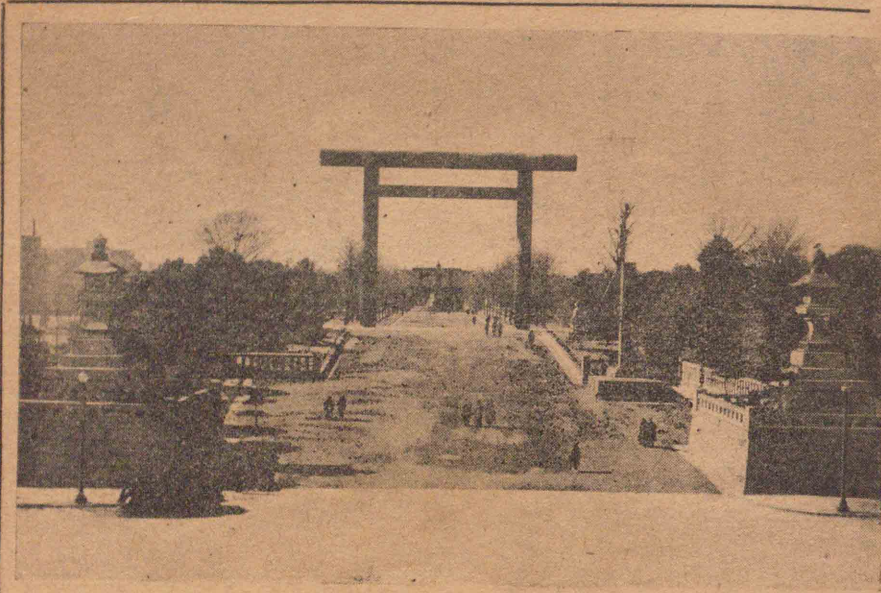




ひます。しせいをきちんと正しくして、おごそかに歌ふと、身も心も、ひきしまるやうな氣持になります。

戦地で、兵隊さんたちが、はるかに日本へ向かつて、聲をそろへて、「君が代」を歌ふ時には、思はず、涙が日にやけたほほをぬらすといふことです。

また、外國で、「君が代」の歌が奏されることがあります。その時ぐらゐ、外國に行つてゐる日本人が、日本國民としてのほこりと、かぎりない喜びとを感じることはないといひます。



### 三 靖國神社

東京の九段坂の上に、大きな青銅の鳥居が、高く立つてあります。その奥に、りつばな社が見えます。それが靖國神社です。

靖國神社には、君のため國のためにつくしてなくなつ

たたくさんの忠義な人々がおまつりしてあります。

毎年春四月三十日と、秋十月二十三日には例大祭があつて、勅使が立ちます。

また、忠義をつくしてなくなつた人々を、あらたにおまつりする時には、臨時大祭がおこなわれます。その時には、天皇陛下が行幸になり、皇后陛下が行啓になります。

お祭の日には、陸海軍人はいふまでもなく、参拜者が引きもきらず、あの廣いけいだが、すきまのないまでになります。

君のため國のためにつくしてなくなつた人々が、かうして神社にまつられ、そのおまつりがおこなはれるのは、天皇陛下のおぼしめしによるものであります。

私たちの郷土にも、護國神社があつて、戦死した人々がまつられてゐます。

私たちは、天皇陛下の御恵みのほどをありがたく思ふとともに、ここにまつられてゐる人々の忠義にならつて、君のため國のためにつくさなければなりません。

四 能久親王

北白川宮能久親王は、賊をおうちになるために、臺灣へお渡りになりました。明治二十八年五月のことであり



ました。

お着きになつたのは、臺灣の北のはしの、さびしい村でありました。お休みになるやうな家もないの

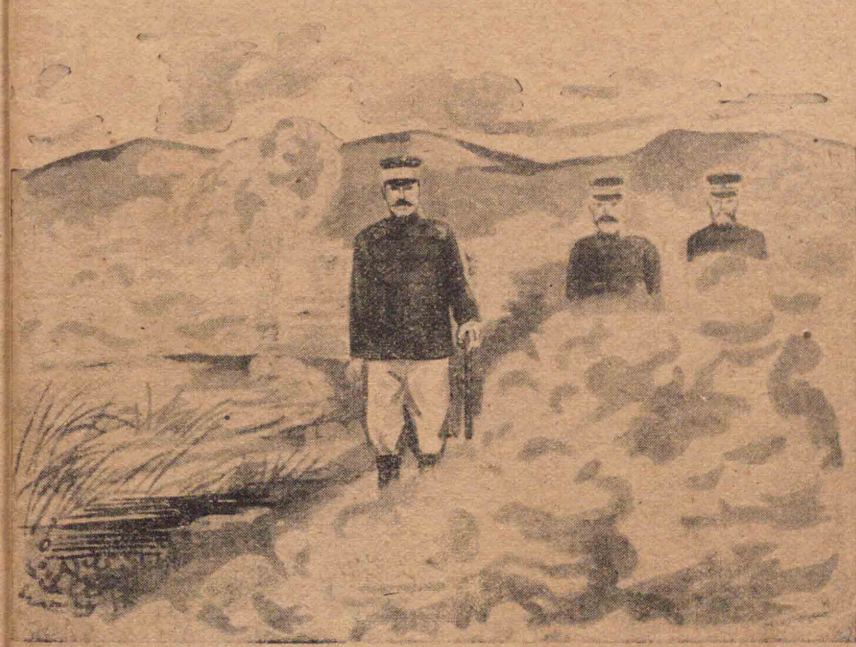
で、幕を張り、そまつな椅子を置いて御座所としました。夜になると、かがたくさん出て、よくお眠りになることもできませんでした。

軍をお進めになるにしたがつて、ごなんぎは、いつそうくははつて行きました。

けはしい山坂をおこえになるのに、青竹をつゑにつき、わらぢに岩かどをふみしめてお進みになりました。

木かげも何もない戦場で、焼けつくやうな、はげしい日光にさらされながら、戦争の指圖をなさいました。

こんなきげんなことも  
ありました。大きな川を  
へだてて、賊と向かひ合つ  
ておいでになると、をりか  
ら飛んで来た大砲の弾が、  
御上をかすめて、おそばに  
落ちました。しかも、親王  
は、まるでそれにお氣づき  
にならないかのやうにお



ちついでいらつしやいました。

そのうちに、わるいねつ病がはやりだして、たくさんの  
兵士が、次々にかかりました。親王は、御自分のきげんを  
おいとひもなく、兵士をおみまひになり、召しあがり物ま  
でもお分けになつて、おいたはりになりました。

かうして、臺灣は、日一日と、おだやかになつて行きまし  
たが、南の方には、まだ賊が残つてあましたので、その方へ  
お進みになりました。すると、その途中で、親王は、ねつ病  
におかかりになりました。おそばの者は、しんばい申し

あげて、

「おとどまりになつて、ごやうじやうなさいますやうに。」  
と、おすすめいたしました。が、親王は、

「自分は、重いつとめの身であるから、一日も、とどまるわけには、いかない。いのちのあるかぎり、は進まう。」  
とおつしやつて、そまつなかごにお乗りになつて、お進みになりました。

御病氣は、しだいに重くおなりになりました。さうして、君のため國のため、このやうにおつくしになつた親王は、とうとう遠い臺灣の地でおなくなりになりました。

### 五 宮古島の人々

明治六年、ドイツの商船ロベルトソン號は、日本の近海で、大あらしにあひました。帆柱は吹きをられ、ボートは押し流され、あれくるふ大波の中に、三日三晩、ゆられにゆられました。さうして、運わるく、沖繩縣（ひら）の宮古島の沖で、海中の岩に乗り上げてしまひました。

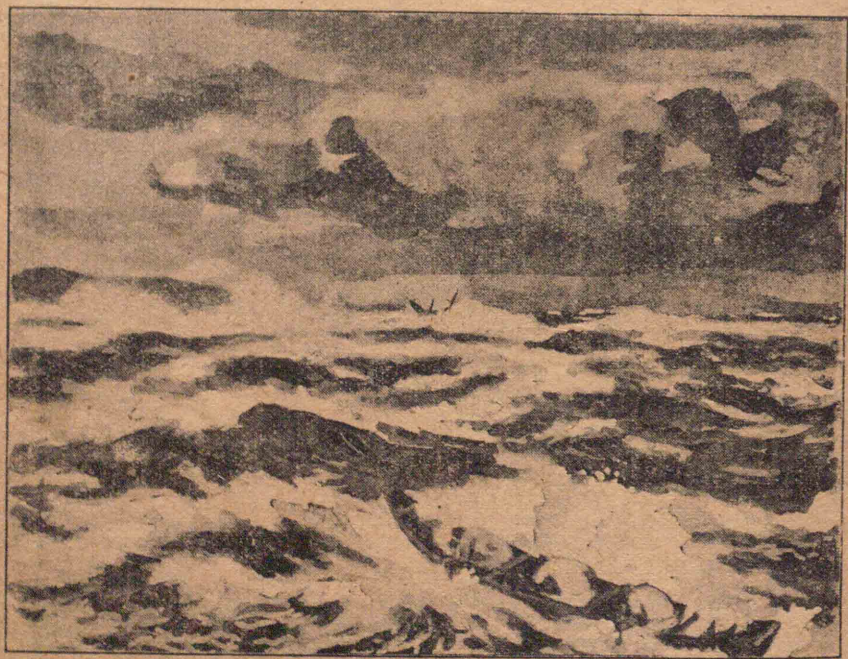
船員たちは、こはれた船に取りついて、一生けんめいに

助けをもとめました。

この船をはるかに見た宮古島の見張りの者は、すぐ人を呼び集めて、助け舟を出しました。しかし、波が高いので、どうしても近づくことができません。日はとつぶりとくれました。しかたなく、その夜は、陸にかがり火をあかあかとたいて、ロベルトソン號の人たちをはげましながら、夜を明かしました。

あくる日は、風もおどろへ、波もいっくらか静かになりました。島の人は、今日こそと勇んで、海へ乗り出しました。

た。舟は、木の葉のやうにゆられ、たびたび岩にぶつかりさうになりましたが、みんなは力のかぎりこいで、やつとロベルトソン號にたどり着きました。さうして、つかれきつてある船員たちを、残らず助けて歸りました。



藥をのませたり、傷の手當をしたりして、島の人々はねんごろにかいはうしました。ことばが通じないので、國旗をいろいろ取り出して見せますと、始めてドイツの人であることがわかりました。

かうして一月あまりたつ間に、ドイツ人は元氣になりました。そこで島の人々は、一さうの大きな船をかして、ドイツ人を本國へ歸らせることになりました。出發の日、島の人々は、かねやたいこで、にぎやかに見送りました。何人かの人々は、小舟に乗つて、案内をしながら、はるか沖あ

ひまで送つて行きました。

船員たちは、月日を重ねて、ぶじに本國へ歸りました。うれしさのあまり、あふんごとに、しんせつな日本人のこゝとを話しました。

そのうはさが、いつのまにか、ドイツの皇帝に聞えしました。皇帝は、たいそう喜んで、軍艦に記念碑をのせて宮古島へ送りました。その記念碑は、今もこの島に立つてゐて、人々の美しい心をたたへてゐます。

六 日本は神の國

今から六百年ばかり前のことです。

北畠親房は後醍醐天皇の仰せを受け、義良親王のおともをして、東國の賊軍をこらしめるために出かけました。

途中、海上ではげしいあらしにあひ、親房は常陸の國へ流れ着きました。

親房は、わづかの兵をつれ、ここの城、あそこの城にたてこもつて、賊の大軍とたたかひつづけました。

親房は、つくづく思ひました。

「このころ、賊の勢のさかんなのは、日本の尊い國がらをわきまへない者が多いからである。」

そこで、親房は陣中にありながら、ふでをとつて國史の本を書き、ことにしました。

親房はその本の初めに、かう





書きました。

「大日本は神の國である。神がこの國をお開きになり、あまてら子おほみかみ天照大神が、天皇の御位をながくさかえますやうに、お傳へになつた。これはわが國だけにあつたことで、ほかの國には、まつたくないことである。だからこそ、わが國のことを、神の國といふのである。」

天照大神の仰せにより、天神のお血すぢをおうけになつた天皇が、日本をお治めになります。臣民は、祖先のころざしをうけついで、ひたすら、天皇の大みわざをおた

すけ申しあげてまゐりました。かやうに、國の初めから、君と臣との分がさだまつてあるといふことが、日本の國の一番尊いところであります。

外國の歴史を見ますと、一つの國が起るかと思へば、やがてほろび、そのあとに、また別の國が起るといふやうなことを、何度もくり返してみます。日本のやうに、一つの國が、天地のつづくかぎりさかえるといふことは、決して見られないのであります。

親房はこのことを、その國史の本に書きました。

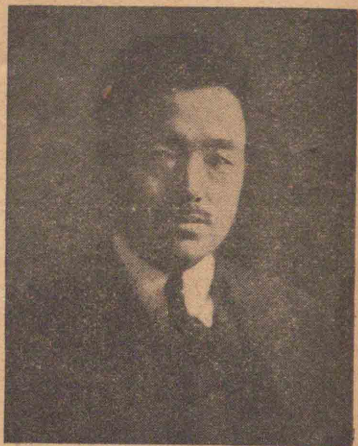
親房の本は六百年前に、人々の心をふるひ立たせたばかりでなく、今の人々をも力強く教へみちびいてくれるのであります。

親房はこの本の中に、

「忠義をつくし、命をすてるのは、臣民の道である。」

といつてあますが、これは、私たちの忘れてはならないことばであります。

### 七 野口英世<sup>ひぐち</sup>



英世は、三歳の時、あろりの中にころがり落ちて、ひどいやけどをしました。母のかいはうで、命だけは取りとめました。が、左の手は、五本の指がくつついて、まつたくきかなくなつてしまひました。

それでも、英世は元氣に育ちました。その上りかうでしたから、五六歳のころには、何をやつても、近所の子どもに負けたことはありませんでした。子どもたちは、くやしきぎれに、英世の手がかたはであることをからかひま

した。

學校へ行くやうになると、いつそうみんなから笑はれたり、からかはれたりしました。英世は、じつとそれをこらへて、

「よし、手はかたはでも、一心に勉強して、お國のために、きつとりつばな仕事をしてみせるぞ。」  
と、かたい決心をしました。

英世の家は、磐梯山ばんだいてんのふもとの町へつづいた道のそばにありました。かやぶきの小さな農家のうかで、わらごぎをし



いた部屋が二つ、あとは土間となり合はせの馬小屋があるだけでありました。

母は、骨身をしまわず、よく英世のめんだうを見ました。この母にたいしても、英世は、ほかの子どものやうに、遊んである氣にはな

れませんでした。

その地方は、雪の多いところでしたが、元氣な英世は、どんな大雪の日でも、休まず學校へ通ひました。

りかうで、元氣で、何事にもねつしんな英世に感心した人たちは、その手がかたはであることを、かはいさうに思ひました。かうした人たちのしんせつで、英世は、ある醫者しやの手術を受けました。すると、これまで不自由だった手が、どうやら使へるやうになりました。それにつけても、英世は、醫者といふものがありがたい人助けの仕事で

あることを知り、自分も醫者になつて、世のため人のためにつくしたいと思ひました。

そこで英世は、學校をそつげふすると、さきに手術をしてもらつた醫者の弟子てしになりました。さうして、先生の手傳ひをして、一生けんめいに働くかたはら、いろいろと



醫學の本を読み、また外國語のけいこをしました。

やがて、英世は東京に出ました。二十一歳の時、醫者のしけんをりつばに受けて、いつでも醫者になることができるやうになりました。

しかし、それだけでまんどくするやうな英世ではありませんでした。まもなく、アメリカ合衆國がっしゅうこくに渡つて、勉強をつづけ、研究けんきゅうを重ねました。次々に醫學上の新しい發見をし、むづかしい病氣をなほす方法ほうほうを考へて、たくさんの人々をすくひました。

昭和三年、英世はアフリカへ渡つて、恐しいねつ病の研究をしました。をしいことに、自分もその病氣にかかつて、どうどうその地でなくなりました。五十三歳でありました。

このことが、かきあたりかきあたりに聞えますと、特に旭日重光章くわつしやうといふ勳章くんしやうをお授けになりました。世界の學者がくしやたちは、人類の恩人をうしなつたといつて、たいそうをしましました。

八 日本は海の國

日本は海の國です。海の恵みを受け、海にまもられて來た國です。

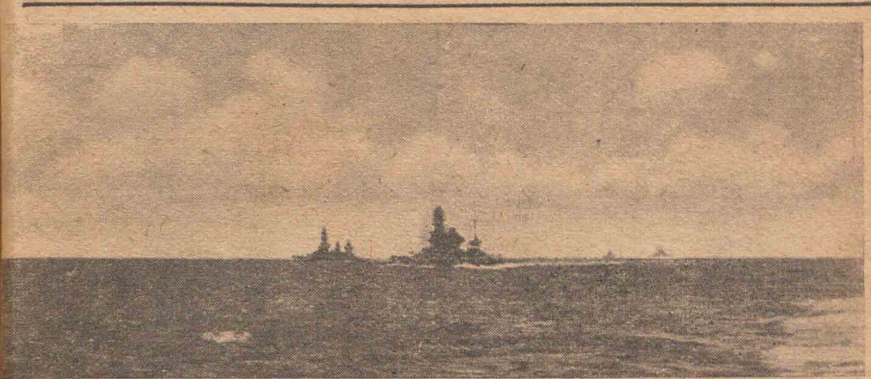
昔から海にしたしんで來た私たちの祖先は、はてしもない大海原おほうなばらを乗りきつて、遠く海外に出かけました。



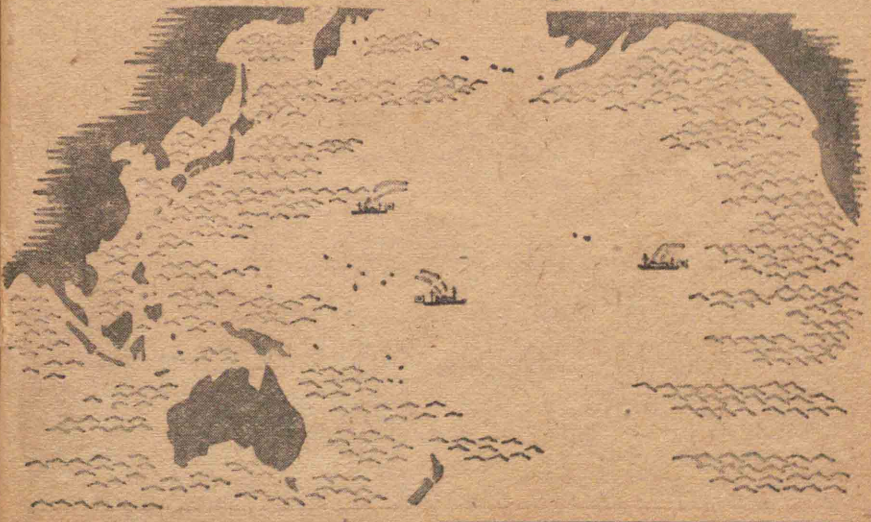
今の日本は、海國日本の名のとほり、世界いたるところの海洋に、日の丸の旗をかかげて、國の光をかがやかしながら活動してゐます。

へさきに菊の御紋章を仰ぐ帝國軍艦は、み國のまもりもかたく、太平洋から印度洋にかけて、その威力を張つてゐます。





海國日本のほ  
まれをあげるぶ  
たいはかぎりな  
く大きいのです。  
その廣いぶたい  
に、日の丸の旗を  
ささげて進むの  
が、私たちの尊い  
つとめです。



### 九 焼けなかつた町

大正十二年九月一日、東京では朝からむし暑く、ときどきにはか雨が降つたり、また急にはげしい日がさしたりしました。

ちやうど、お晝にならうとする時でした。氣味のわるい地鳴りとともに、家もへいも、一度にはげしく震動しました。がらがらと倒れてしまつた家も、たくさんありました。

やがて、倒れた家から、火事が起りました。あちらにも、こちらにも、火の手があがつて、見る見るうちに、一面の火の海となりました。

水道は、地震のためにこはれて、火を消すこともできま  
せん。火は、二日二晩つづいて、東京の市中は、半分ぐらゐ  
焼けてしまひました。

ところで、この大火事のまん中にありながら、町内の人  
たちが、心をあはせてよく火をふせいだおかげで、しまひ  
まで焼けないで残つたところがありました。

この町の人たちは、風にあふられて四方からもえ移つ  
て来る火をあわてずよくおちついて、自分たちの手でふ  
せいだのです。

まづ、指圖する人のことばにしたがつて、人々は二列に  
並びました。第一列のはしの人、井戸から水をくんで、  
バケツやをけに移すと、人の手から手へとじゅんじゅん  
に渡して、ポンプのところへ送りました。第二列の人た  
ちは、手早く、からになつたバケツやをけを井戸の方へ返  
して、新しい水を汲みました。





三十八

そのうちに、かういふ列の組が、いくつもできました。みんな、一生けんめいに水を運びました。また、ほかの一隊は、手分けをして、火の移りやすい店のかんばんを取りはづしたり、家々の窓をしめてまはつたりして、火の移らないやうにしました。

かうして、夜どほしこんきよく火をふせぎました。年よりも子どもも、男も女も、働ける者は、みんな出て働きました。自分のことだけを考へるやうなわがままな人は、一人もありませんでした。

次の日の晩おそくなつて、やつと火がもえ移る心配がうすらいで来ました。みんなは、それに力づいて、どうとうしまひまで働きつづけました。

見渡すかぎり焼野の原になつた中に、この町だけは、りっぱに残りました。

十 秋から冬へ

二百十日もことなくすんで

みのりの秋が来ました。秋の祭日は

秋季皇靈祭しゅうきくわうれいから始ります。秋季皇靈祭は、秋分の日です。

宮中では、天皇陛下の御祖先ごそせんのみたまをおまつりになります。

どこのたんぼを見ても、重さうに稲の穂がたれて、金色の波がうちます。



十月十七日の神嘗祭かんなめがまわります。今年の初穂はつほをまづ伊勢いせの神宮におあげになる日であります。宮中ではお祭まつりがあり、伊勢の神宮へは勅使ちよしがたちます。

神嘗祭が過ぎて、農家のうかは、ますますいそがしくなります。稲刈りの人たちは、雲一つ見えない、すみわたった秋空の下で、一生けんめいに働きます。

十一月三日は明治節です。咲きそろった黄菊白菊の、高いかをりのうちに、明治の御代のみさかえをしのびます。

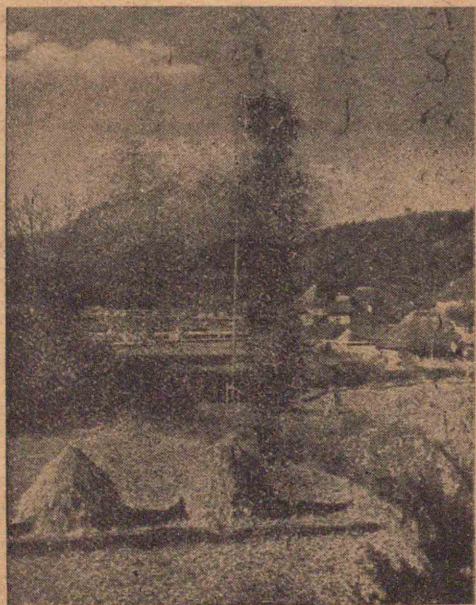
色づいた葉もすつかり落ちて、取り残された柿の實が二つ三つ。取入れはもうすんで、新嘗祭にいなめの日がまあります。十一月の二十三日です。

この日、天皇陛下は、しもの白く置く寒夜を、明け方にかけて、今年の初穂をお供へになつて、したしく神々をおまつりになり、秋のゆたかなみのりのお禮をおのべになつて、ごじしんも召しあがるのであります。

もうこのころから、だんだん冬らしくなります。しも柱をふんで、學校へ急ぐ朝、私たちのほく息が、白く見えて、

寒さは、日一日とくははります。

年の暮が近づくと、一年のうちで最後の旗日、大正天皇祭がまあります。十二月二十五日、この日、天皇陛下の御父君大正天皇がおかくれになつたのであります。



天皇陛下には、宮中で、おごそかなお祭をなさつて、多摩たまた陵みささぎには、勅使をお立てになります。

十一 山田長政ながまさ

今から三百二十年ばかり前に、山田長政は、シヤムの國へ行きました。シヤムといふのは、今のタイ國のことです。

そのころ、日本人は、船に乗つて、さかんに南方の島々國に往來わくらいしたくさんの日本人が移り住んで、いたるところに日本町といふものができました。シヤムの日本町には、五千人ぐらゐ住んでゐたといふことです。

二十何歳でシヤムへ渡つた長政は、やがて日本町の頭かしらになりました。勇氣にみち、しかも正直しやうぢきで、義氣のある人でした。

シヤムの國王は、ソクタムといつて、たいそう名君めいくんでありました。

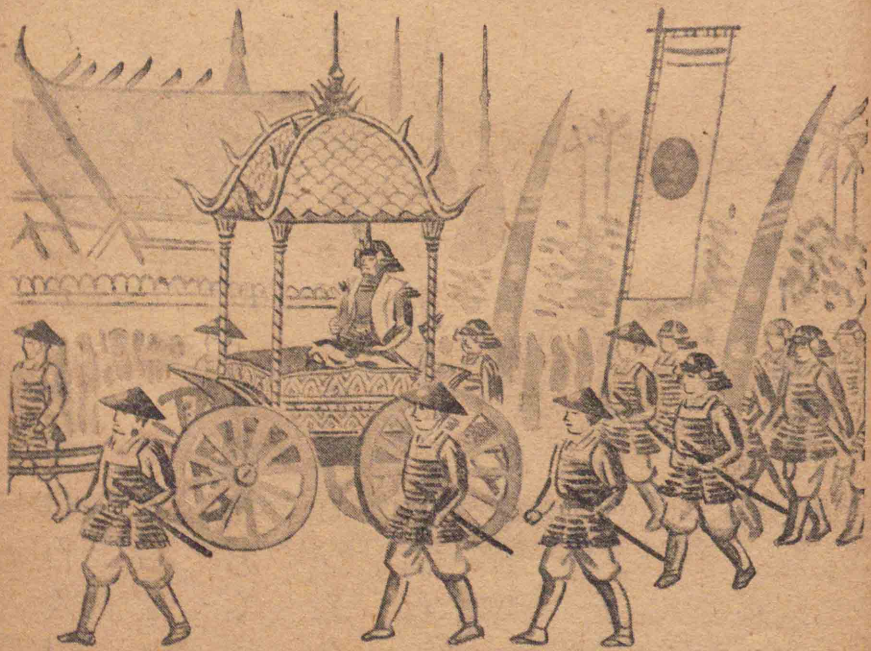
長政は、日本人の義勇軍をつくり、その隊長になつて、この國のために、たびたびてがらを立てました。

國王は、長政を武官に任じ、のちには、最上の武官の位置に進めました。

日本人の中で、武術にすぐれ、勇気のあるもの六百ばかりが、長政の部下としてついて来ました。長政はこれら日本の武士と、たくさんのシヤムの軍兵をひきあて、いつも、堂々と戦に出かけました。長政が、ひをどしひを着け、りつばな車に乗り、シヤムの音楽を奏しながら、都にがいせんする時などは、見物人で、町といふ町が、いつばいだつたといふことです。



長政は、かうして、この國のために、しばしば武功をたて、高位高官にのぼりましたが、その間も、日本町のために活動し、日本へ往來する船のせわをし、海外ばうえきをさかんにすることにとめました。身分が高



くなつてからは、ほとんど毎年のやうに、自分で仕立てた船を日本へ送つておました。

長政がシヤムへ渡つてから、二十年ばかりの年月が過ぎました。名君のほまれ高かつたソクタム王もなくなり、年若い王子が、相ついで國王になりました。かうしたすきに乗じたのか、そのころ、シヤムの屬地であつたナコンといふ地方が、よく治りませんでした。そこで、國王は、あらたに長政をナコン王に任命しました。

そのため、王室では、さかんな式があげられました。ま

だ十歳であつた國王は、特に國王のもちひるのと同じ形のかんむりを長政に授け、金銀やたからものを、山のやうに積んで與へました。

長政は、いつものやうに、日本の武士とたくさんのシヤムの軍兵をつれて、任地へおもむきました。すると、ナコンは、長政の威風ひびに恐れて、たちまち王命をきくやうになりました。

をしいことに、長政は、ナコン王になつてから、わづか一年ばかりでなくなりました。

長政は、日本のどこで生まれたか、いつシヤムへ行つたかもはつきりしません。それが一度シヤムへ渡ると、日本町の頭となり、海外ぼうえきの大立物となつたばかりか、かの國の高位高官に任ぜられて、日本の武名を、南方の天地にとどろかしました。外國へ行つた日本人で、長政ほど高い地位にのぼり、日本人のために氣をはいた人は、ほかにないといつてもよいでせう。

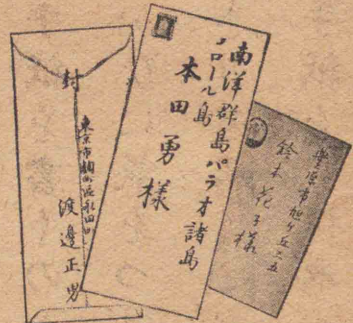
十二 ことばづかひ

つつしみの心を持ち、行儀よくするためには、まづ平生のことばづかひに、氣をつけなければなりません。ことばづかひがぞんざいであれば、人がらがわるく見えます。私たちは、目上の人を尊び、ていねいなことばをつかふやうにしたいものです。

とりわけ、皇室の御事については、最もつつしんで、ことばをもちひなければなりません。つつしみ深い心をことばにあらはすのが、私たち日本人のすぐれた點です。また、友だちどうし、お話する時にも、ことばづかひに氣

をつけることが大切であります。いつもはきはきした  
 ことばで、元氣よくものをいはなければなりません。し  
 かし、元氣よくしようとして、ことばがらんぼうになつた  
 り、人の話を聞かないで、自分だけ話しかけたりして、相手  
 をおもしろくない心にさせるのは、よくないことです。  
 手紙を書くのも、話をするのと同じことです。ことば  
 づかひに氣をつけるのはもちろん、文字もていねいたは  
 つきりと書くことが大切であります。

手紙を受け取つた時には、決してそまつにせず、返事の

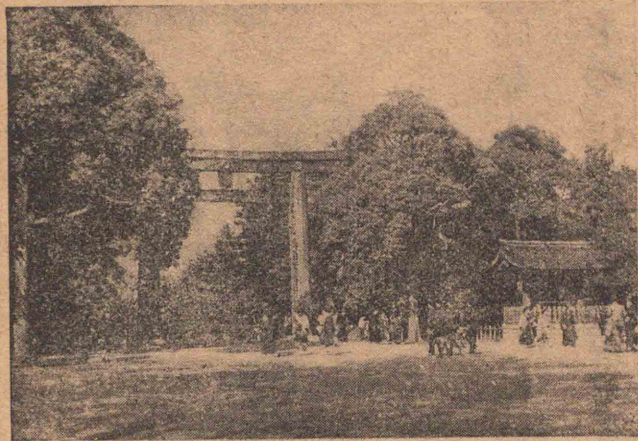


いるものは、すぐに出すやうにしな  
 ければなりません。返事を出さな  
 いのは、話しかけられて、返事をしな  
 いのと同じことです。

したしくなると、私たちは、行儀よくすることを忘れて、  
 何事も、ごんざいになりやすいものですが、これは、よく氣  
 をつけなければならぬことでもあります。したしい仲  
 にも、おたがひに行儀よくしあつて、いつまでも仲よくつ  
 き合ふやうにつとめませう。



十三 明治天皇の御徳おんとく



明治天皇は、國たみを子のやうにおいたはりになり、苦しみも、楽しみも、國たみとともにしようとなさいました。

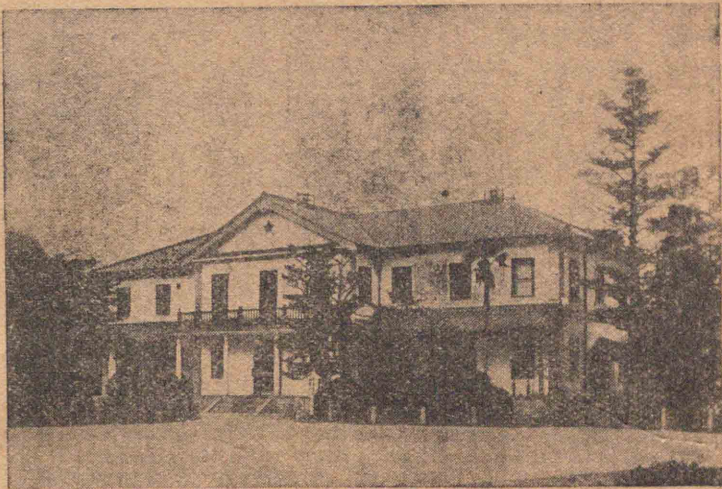
明治十一年、北國をおまはりになつて、地方のやうすをごらんになりました。新潟縣にがたで、御車の中から、目

のわるい者が多いのをごらんになつて、早く目をなほすやうにと、お手もと金をお恵みになりました。このことを記念して、九月十八日を目の記念日としてをります。

地震や、大水や、大火事があつた時などには、いつも御心をおいためになつて、ふしあはせな國たみをおいたはりになりました。また、病氣にかかつて、薬をもとめることができない者があることをお聞きになつて、特にみこことばをたまはり、たくさんのお手もと金をたまはつたこともあります。

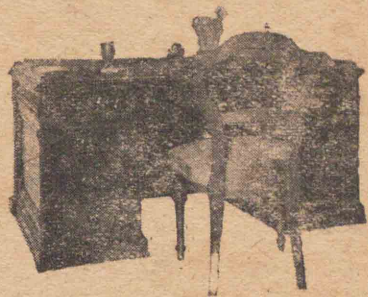
明治二十三年に、愛知縣で大演習があつた時のことであります。天皇は、雨のはげしく降る中を、兵士と同じやうに、御づきんをお召しにならず、熱心に全軍のお指圖をなさいました。

明治二十七八年の戦役には、大本營を廣島へお進めになりました。したが、かぎり一つもないせまい御間に、八箇月といふ長い



間をお過しになりました。朝は早くから、夜はおそくまで、少しのひまもお休みにならないで、次から次へと、いろいろの御命令をおくだしになりました。

天皇は、きはめて御質素でいらつしやいました。おそれ多いことではありますが、宮中の表御座所でおもちひになるすずり箱や、ふで、すみなどは、ごくふつうのもので、それを役にたたなくなるまで、お使いになりました。御間の敷物が古くなつて色が變つても、御心におかけにならず、御椅子の下の毛皮も、破れたところを、たびたびおつく



ろはせになりました。

かうした御品は、今、明治神宮の寶物殿にをさめられてありますが、私たちはこれを拜觀して、その御質素なのに、ただ頭がさがるばかりであります。

#### 十四 雅澄の研究

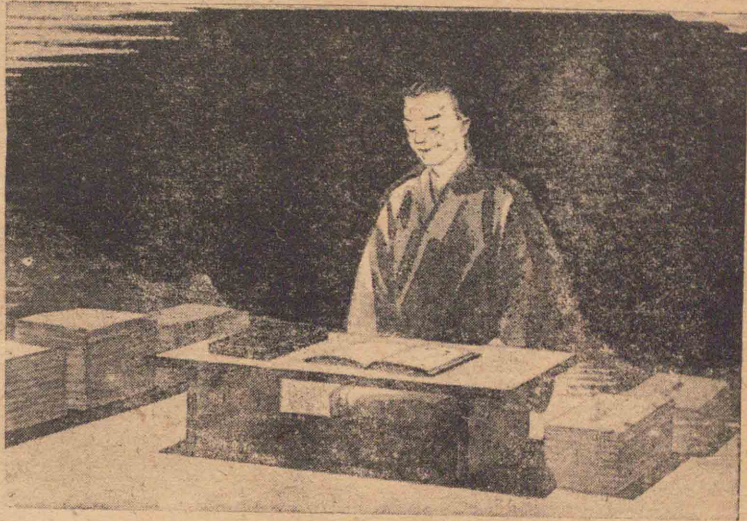
土佐の國に、鹿持雅澄といふ學者がありました。

まづしい家に生まれたので、勉強をしようにも、本をも

とめることができませぬ。雅澄は、知合ひの人から本をかりて来ては、熱心に讀みふけりました。

家の屋根がいたんでも、つくるふことができず、雨の降る日には、もらないところに、机の置場所を移しながら、研究を続けました。どんなに苦しいことがあつても、氣を落さず、一生けんめいに勉強して、とうとう萬葉集古義百三十七卷を書きあげました。

萬葉集といふのは、日本の遠い昔の人たちの歌を集めた、大切な本です。雅澄は、萬葉集の古いよみ方や意味を



ければ、世の中には出ないだらう。」

よくわかるやうにし、日本の道を  
明らかにしたのであります。  
日本の中央からはなれた土地  
ではあり、ゆききにも不自由な時  
代のことでしたから、こんなりつ  
ばな研究も、世間に廣く知られま  
せんでした。

「自分の研究は、死んでからでな

と、雅澄はさういつて、下書を書いたままで、なくなつてしまひました。

その後二十年ばかりたつて、明治天皇は、雅澄の研究についてお聞きおよびになり、かしこくも、大御心によつて、「萬葉集古義」が、宮内省（みやうちしょう）からしゆつばんされることになりました。

かうして、雅澄の心をこめた大研究が、始めて全國に知られ、光をあらはすことになりました。

十五 乗合船

若い男が、さもどくいさうに、けいしょ經書のかうしやくを始め  
ました。

昔の乗合船の中のことです。乗つてゐる人は、二十人  
もありませうか。見たところ、ひやくしやうお百姓か、大工さんか、商人  
らしい人ばかり、あとは女が二三人です。若い男は、口に  
まかせて、しやべりたてました。

つひ、調子にのると、いかげんなでたらめも出て來ま

す。しかし、そんなことに氣のつくえらさうな人は、一人  
もあないと、若い男は思ひました。

「どうだ、感心いたしたか。」

かうしやくが終ると、若い男はかういつて、みんなを見渡  
しました。

「いや、ありがたいお話でございました。」

ど、いかにも正直者しやうじきらしいお百姓が、ていねいに頭をさげ  
ました。

「なかなかむづかしくて、私どもにはわかりかねますが、

先生はお若いのに、たいそう學問をなさつたものでございませうな。

と、これは商家の番頭らしい人がいひました。

「先生」といはれて、若い男は、いつそうとくいの鼻をうごめかしました。

「いや、なに、たいしたこともないが、これでわしは、ごく



おぼえのいい方でな。神童といはれたものだよ。」

「神童と申しますと。」

「神童がわからないのか。」

さう思ふと、若い男は、いつそ  
う相手をみくびつて、ことば  
づかひが、かうまんになりま  
す。



「おまへたちにはわかるまい。神童とは、神の童と書く。」

童は子どものことだ。」

「へえ、では神様のお子様でございますか。」

「ははは、無學な者には、さうとても思ふほかはあるまい。」

若い男は、大きく笑ひました。

しかし、この若い男に、ふと一人の人が氣になりだしました。最初は、これも百姓だらうぐらゐに思つて、氣にもとめませんでした。が、どこか品のある中年の男です。

「いしや醫者かな、醫者なら、少し學問もあるはずだが、あの男は、

かうしやくを聞くでもなし、聞かないでもなし、今みんなが、かうほめてゐるのに、ただ、たまつてゐる。どうせわからないのだらう。してみると、やつぱりゐなか者で、少しばかりの金持であらう。」

若い男はさう思つて、たつてそれ以上、氣にもとめませんでした。

いよいよ、船が陸に着くまぎはになりました。みんなは、船をおりる用意をします。

「おたがひに、名をいつて別れることにしよう。」

と、あの若い男がいひました。

「私は、番頭の半七と申します。」

「早川村の百姓、義作でございます。」

「大工の八造と申します。」

一同が順々に名のりました。さうして、あのみなかの金持らしい人の番になりました。

「福岡の貝原久兵衛と申す者。」

いかにもおちついたことばでいひました。

この名が、あの若い男の頭に、がんとひびきました。「貝

原久兵衛とは、世にかくれもない貝原益軒先生であることを知つてゐたからです。若い男は、そのまま逃げ出すよりほかはありませんでした。ひらりと岸にとびおりるが早いか、一もくさんにかけて出しました。

「ははははは。」

と笑ふ聲が、後から追ひかけるやうな氣がします。

「ばか、ばか。ばかだな、おれは。」

若い男は、自分自身をあざけるやうに、かういひながら、わけもなく走つてゐました。



十六 新年から春へ

年の始めを祝ふ新年の祝日は、

一月一日、二日、五日の三日です。宮中では、

一日、二日に朝賀の式、五日に新年宴會をおもよほしになります。私たち國民は、家々に、日の丸の旗と門松を立てて、さかえ行く御代の年の始めを祝ひ、天皇陛下の萬歳を祈ります。



新年の祝日にはさまれて、一月三日の元始祭があります。年の始めにあたつて、天皇陛下が神々をおまつりになる日であります。

新年になると、よく春が来たといひますが、季節の上では、まだ冬です。一月中は、野も、山も、冬の色に包まれています。

冬の眠りを破るものは、梅の花です。節分もすんで、梅のつぼみがふくらみ始めるころ、二



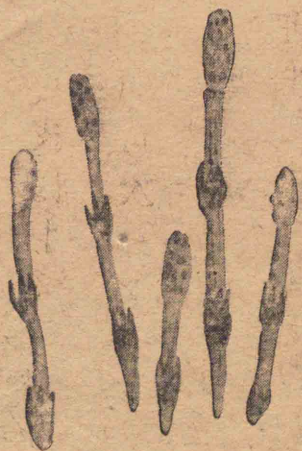
月十一日の紀元節がまあります。宮中ではお祝ひがあり、私たちはおごそかな紀元節の歌に、神武天皇が始めて天皇の御位におつきになつたことをおしのび申します。梅の花について、桃の花が咲き、木の芽はだんだん出て来て、うらかな春になります。

彼岸櫻の咲く春分の日、

春季皇靈祭がおこなはれます。

秋季皇靈祭と同じやうに、宮中で

御祖先のみたまをおまつりになります。



この日を中心として一週間は、彼岸といつて、私たちの家でも、先祖の祭をいたします。

十七 乃木大將の少年時代

乃木大將は小さい時からだが弱く、その上、おくびやうでありました。そのころの名を無人といひましたが、寒いといつては泣き、暑いといつては泣き、朝晩よく泣いたので、近所の人は大將のことを、無人ではない泣人だといつたといふことであります。

父は長府の藩士で、江戸にゐましたが、自分の子どもがかう弱虫では困る、どうかして、子どもの中からだを丈夫にし、氣を強くしなければならぬと思ひました。

そこで、大將が四五歳の時から、父は、うす暗いうちに起して、ゆきかへり一里もある高輪の泉岳寺へ、よくつれて行きました。泉岳寺には、名高い四十七士の墓があります。父は、みちみち義士のことを聞かせて、その墓にお参りしました。

ある年の冬、大將が、思はず「寒い」といひました。父は、

「よし。寒いなら、暖くなるやうにしてやる。」

といつて、井戸ばたへつれて行き、着物をぬがして、頭から、つめたい水をあびせかけました。

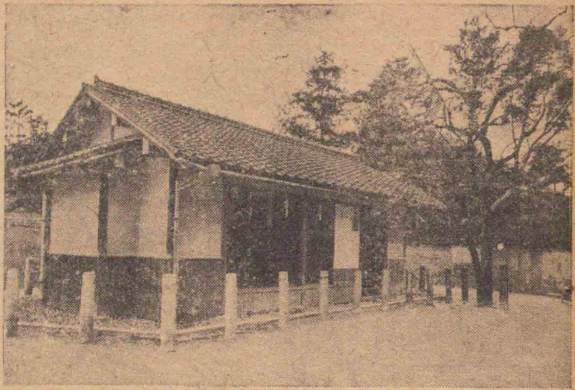
大將は、これからのち一生の間、「寒い」とも「暑い」ともいはなかつたといふことであります。

母もまた、えらい人でありました。大將が、何かたべ物



のうち、きらひな物があるとみれば、三度三度の食事に、かならずそのきらひな物ばかり出して、すきになれるまで、うちぢゆうの者が、それをたべるやうにしました。それで、まつたく、たべ物にすききらひがないやうになりました。

大將が十歳の時、一家は長府へ歸ることになりました。その時、江戸から大阪まで、馬にもかごにも乗らず、父母といっしょに歩いて行きました。そのころ、からだは、もうこれだけ丈夫になつてゐたのです。



長府の家は、六でふ、三でふの二間と、せまい土間があるだけの、小さなそまつな家でありました。けれども、刀、やり、なぎなたなど、武士のたましひと呼ばれる物は、いつもきらきら光つてゐました。

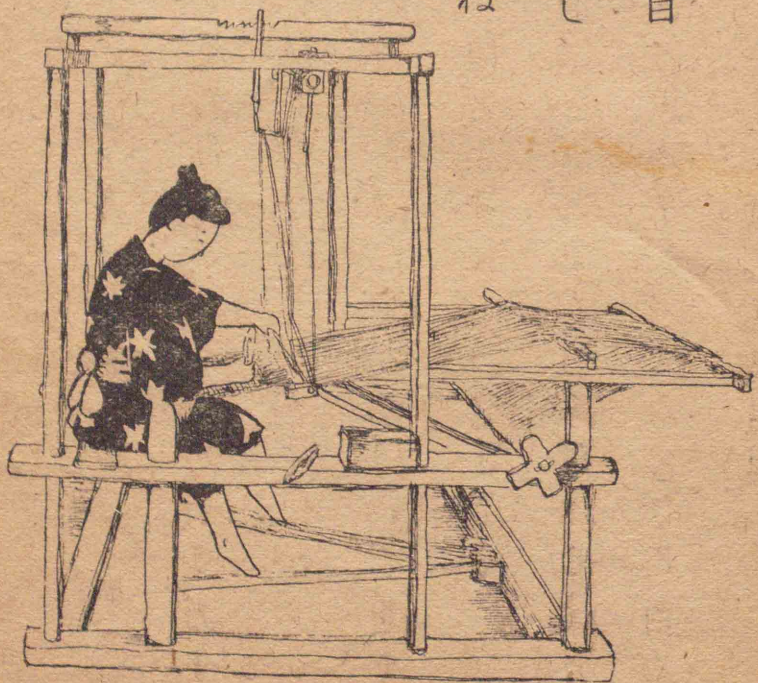
この父母のもとで、この家に育つた乃木大將が、一生を忠誠と質素で押し通して、武人の手本と仰がれるやうになつたのは、まことにいはれのあることであります。

十八 くるめがすり

でん子は自分の着ふるした仕事着をつくらつてあま  
した。まだ十二歳ですが、ひじやうにりかうで、ほがらか  
な子どもです。七八歳の時から、はたおりのけいこをし  
て、今では大人に負けなほほど、上手になりました。  
つくろつてある仕事着は、ひぎのあたりが、すり切れか  
かつてあます。よく見ると、黒い糸が、ところどころ白く  
さめて、しぜんともやうのやうになつてあます。

「まあ、おもしろい。」

と思ひながら、でん子の目  
は、急に生き生きとしまし  
た。仕事着の糸を、ていね  
いに、ときほぐして、黒と  
白との入りまじつたぐ  
あひを、熱心に調べ始め  
ました。それから後は、  
御飯をたべるのも忘れ



て、一心に工夫してみました。四五日たつて、でん子は、おり残りの白い糸を、どころどころ堅くくくつて、

「これを、このまま染めてください。」

と、こうやに頼みました。

染めができるのと、くくり糸をといて、縦糸と横糸とに、うまくとり合はせて、はたに掛けました。おつてみると、でん子の思つたとほりに、こん色の地に、雪かあられの飛び散つたやうな、美しいもやうが現れました。

できあがつたものは、しまでもなければ、しぼりでもあ

りません。今までだれも見たことのない、めづらしいおり物でありました。

父母や近所の人たちは、目をみはつて、

「これは、かほつたものだ。めづらしいものを思ひついたね。」

といつて、ほめました。でん子は、いろいろながらを、次々に工夫しておりあげました。

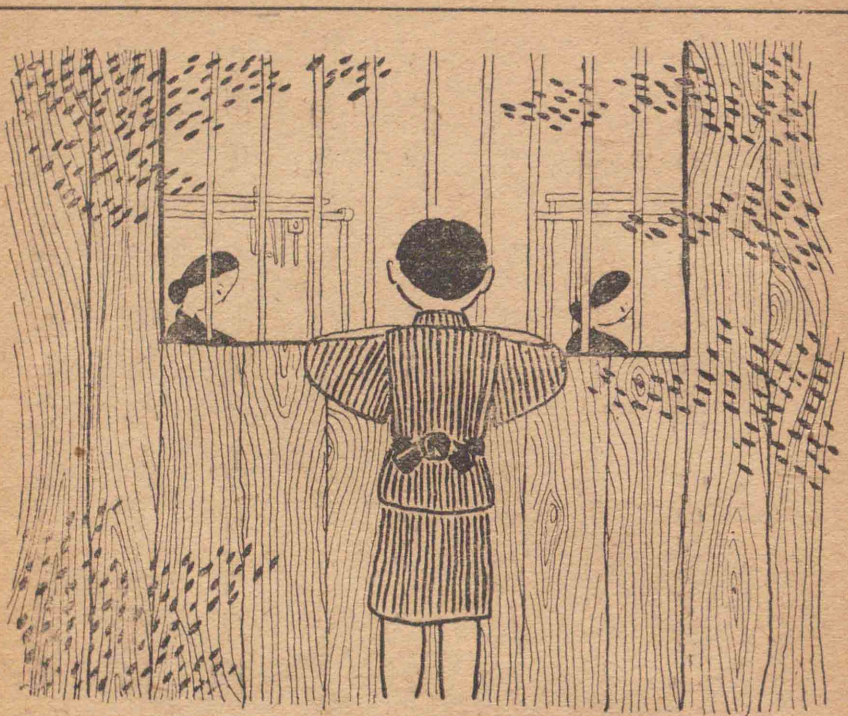
でん子の父は、「くるめがすり」と名をつけて、それを世にひろめました。

「めづらしいがらだ。女の子が思ひついたのださうだ。」  
 「十二の娘が作ったとは、えらいものだ。」

世間では、たいそうなひやうばんです。そのうちにおり方を習ひたいといふ者が、出て来るやうになりました。

十九 工夫する少年

でん子の家から少しはなれたところに、久重ひさしげといふ少年があました。細工さいくをすることがすきで、毎日二階にどちこもつて、からくり人形を作つたり、ばね仕掛けのすず



り箱を作つたりして喜んであました。

久重は、ときどきでん子の工場へ遊びに来ました。でん子は、今では大人になつて、かすりをおるのに、いそがしく、大勢の人を使つてはたをおつてあましたが、久重

は、それをおもしろさうに見てみました。

ある日、この少年がでん子にいひました。

「ねえをばさん。かすりて繪をおることはできないでせうか。」

「繪とは、もやうのことですか。」

「はい。花でも、鳥でも、繪にかいたとほりをもやうにおり出すのです。」

「あなたは、小さいのに、えらいことをいひますね。なぜ。」

「わたしは、ずっと前からそれを考へてみました。しかし、繪をおるには、いろいろ仕掛けもいるし、工夫もむづかしい。わたしはこのとほりいそがしいので、まだそこまで考へるひまがないのですよ。」

「それならひとつ、私が考へてあげませうか。」

「さう、久重さんは考へることもうまいし、細工も上手だから、どうか頼みますよ。」

久重はすつかりのみこんだやうな顔をして、歸つて行きました。



どんなに考へることがうまいといつてもまだ小さな  
子どものことです。でん子は頼みはしたものの、あてに  
はしないであました。

すると十日あまりたつて、何かいろいろのものを持つ  
た久重が、にこにこしながらやつて来ました。

「をばさん、できました。」

「何がさ。」

「この前、約束したものですよ。」

「きう。」

といつて、持つて来たものを調べ、その説明を聞いてみる  
と、でん子もびつくりしないで、はあられませんでした。

「まあ、久重さん。一人で考へたのですか。」

「ええ、ちよつと骨が折れました。」

「えらいね。ありがたう。ほんたうにありがたう。」

でん子は大喜びで、久重に何べんもお禮をいひました。

それから、二人が力を合はせて工夫したので、りつばな  
繪がすりができるやうになりました。

二十 大陸と私たち

満洲國が生まれたのは昭和七年のことです。そのうち、満洲國の皇帝陛下は、二度も日本をおたづねになり、日本からは、天皇陛下の御名代として、秩父宮殿下、高松宮殿下がおいでになりました。かうして御親交が重ねられて、いよいよ日本と満洲國とは、

切つても切れないう國となりました。

満洲國の廣さは、日本の二倍もあります。住んである人の數は、日本の三分の一ぐらゐしかありません。それで、これから開いて行かなければならない土地が、たくさんあります。開いて行けば、農作物も、石炭も、鐵も、木材も、どれほど取れるかわかりません。

満洲國には、いろいろの民族が集つ



て暮してゐます。顔かたちや、ならはしの違つた人々ではありますが、みんな満洲國をりつばな國にしようど、心をあはせ、日本にならつて、仕事にはげんでゐます。



満人の子どもは、からだも大きく、力も強く、蒙古人の子どもは、かんげきする心が深く、またロシヤ人の子どもは、きまりのよい生活をします。これらの子どもたち

と、日本の子どもは、しつかり肩を組んで進まなければなりません。

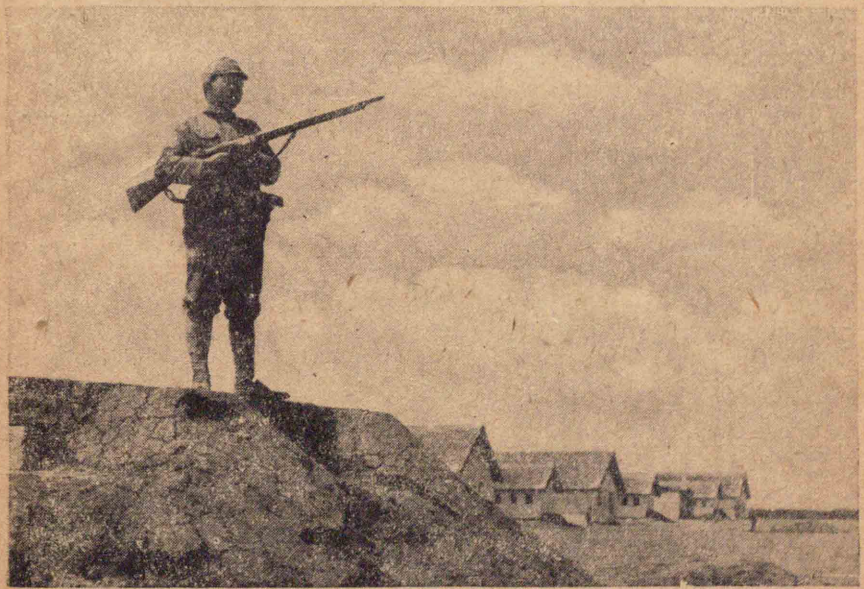
満洲國のおとなりは、支那です。

支那は、日本の十五倍もある大きな國です。日本では見ることできない、廣々とした畠や、大きな川がいくらもあります。こんな廣い土地に生まれ育つた支那の子どもは、心持もいつのまにか大きくなつて、ゆつたりとしてゐます。

日本と支那とは、昔からゆききして、手をとりあつて來

ました。

今、日本は、大陸から南方へかけて東亞<sup>とうあ</sup>を新しく立てなほすために、勇ましく戦ひもし、またあたたかくみちびきもしてゐますが、一日も早く、いつしよに楽しく働くことができる日の来るのを願はずにはゐられません。



私たちのおとうさんや、いさんは、大陸から南方へかけて出かけ、命がけの働きをしてゐます。この仕事は、大きな大きな仕事で、長い月日がかかります。やがて、私たちが代つて大陸へ渡り、後をひきついで働く日がまゐりませう。

その時のお役に立つやうに、今から丈夫なからだ、ゆたかな心とをやしなつておかなければなりません。

昭和十七年十二月十九日  
昭和十七年十二月廿一日  
昭和十七年十二月三十日  
修正印刷  
翻刻發行

著作權所有

著作兼  
發行

文部省

初等科修身二

定價金拾六錢

昭和十七年十二月二十二日  
文部省檢査濟



翻刻發行  
兼印刷者

代表者 井上源之丞

東京書籍株式會社

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

印刷所

東京書籍株式會社工場

發行所

東京書籍株式會社

初

加藤

広島大学図書

2000302728

